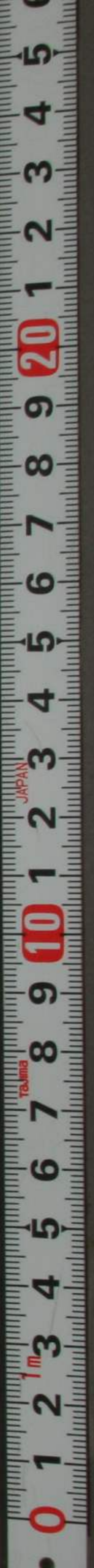


里見八犬傳

第四編

卷之五

13  
709  
20





門一遠 19  
號 709  
卷 20



明治三六年  
十月九日  
購求

南總里見八犬傳第四輯卷之五

第三十九回

二箱を飲めて良儔夫妻を葬る  
一葉を浮りて壯士兩友を送る

文明十年戊戌の夏六月廿二日の朝未明は犬塚大飼の兩義士、大照文  
ホと俱は犬田小文吾を目送りし門の戸やと引闔く舊の席は團坐しつ  
あつた骸を隠さんとして泣沈むる妙真をおぼつたなくも案内して辛く納戸  
あり求むる兩箇の葛籠は山林夫婦の骸を精悍しく歛め、その表を延ぶ  
包にて船荷のどく造る程は、大法師と照文は入江橋のほとりまで、  
舟艫を竊は背戸川へ漕よび、霧あければ人あらしむ、又彼孟六、鹹四郎、  
三個の悪棍の亡骸は信乃と現八と背戸の河原へ扛りて出、腰に錘の石を

南總里見八犬傳第四輯卷之五

山崎堂藏



附く水底あつく沈るよ、大ハこれ中も田向して頓生菩提と念ひれば人々  
 有繫は不便はおぼえ共念佛をうらむとく、はる程よもや痺送もあ、  
 整ひふ天の暗うと進退既便宜をゆる入江橋のほとり不兵絶て  
 那誘更この隙を具た領き謀合ひ出船の機とくとき念妙真  
 大ハの親兵衛と抱たつ葛菴は添めく船は来る信乃現八もあ来りて  
 板子の下は伏しとる當下蛭崎照文ハ簑笠は姿を窺て竊は船を  
 漕せば大ハとる吊りく霎時河原は目送ふは送は其処とも見えん  
 方よ是義士節婦を皇天憐れむひん雷のいみく立菴く咫尺の間も  
 定りぬ彼帆大夫が遠見の兵の退るをありとてゆいそふこれをあは  
 船路は障りなく海上遙は走る程は雷收りく日ハあかりこれバとあ  
 照文ハ楫より迷ふべくもわくは素より安房人かりなれば水とて陸より易

市川の郷を吾侪の家ハ彼処と妙真が指すありく船ハ門  
 邊は著はけを痺の便宜ハ是のなを大江屋の篙工們ハあく遠く船を  
 出く昨夕より一人も在らぬ留守耳のひ疎くそ只炊とる婆々のこれバ  
 信乃現ハ後あはく照文とも小河岸は登り妙真を先立して柩お  
 代方両箇の葛菴と終母屋は運び入れて家廟のほとり扛居る客も  
 わるも慰めりく齊一嘆息をうらむあふあもとも妙真ハ心なぬわしくあは  
 こが子の義烈は羞らうけん復らうしうは面色せば奥の一室の塵も拂く  
 信乃と現ハこの処は潜り照文も茶を勧め膳を薦めわたりる餐の町噂  
 又暇ある折々あはのびくは家廟は對して香を焼た花を齊脱てこが子と息婦の  
 後世を吊み看経の外他もあく忘れんは生憎よその面影の目見えん  
 いふしらの胸よのちひあは禁りて落る涙の玉匣ゆ親あうなはれと



あつあつに推見の母と慕はる大人一く或は外は出門は立ち獨遊は餘念は  
 鳩の車は竹馬は走り疲れ假寐の裾は衣添もぬれ睡顔と見え親は肖て  
 遅くは生育も今茲も未は逢ある土用央よと秋の風より悲しは残る  
 老の身よとむらむ抱は揚は夢欲現う懐へんとさし入れて萎る  
 乳房を探るも哀れなりかきとの瞶昏は小文吾、大はうわつれ行徳  
 より来より妙真をかくれとんと奥へ案内を信乃現照文  
 亦ハ歡びく對面し彼條の首尾を咨く文五兵衛が安危を問ふ小文吾を  
 密に量るハ某路と急ぎく莊官檀内許赴は雷深はる閑ぬ諸  
 折戸をち敲はる天塚信乃が首捕を來れと報へ且して召入れ新織  
 帆大夫奥より出てさう夏之趣と問糾を狐疑の用心大さか檀内を  
 側は坐り夥兵はあて十手を把りく左右間ち捕巻るその某はひるやう

豫く仰を稟るべく僕きのみの黄昏は宿所は走り還りく果て二個の  
 旅客をけりそ武士の身の中は刀瘡をのあつと起居は聊不便ありく  
 彼は賜に骨相圖をち披きくこれ彼竊は命をれば年紀より面影あり被  
 うり衣の色もその模様些し違はれが替者は撈りくその人をびん  
 下もいづ現疑はくもわぬ信乃とやんは極まりとあはれはより氣が暗ひて  
 酒食を薦め更閑臥房は潜ありて只て刀は刺殺しを首捕てやうり交り廣き  
 僕もよもきのあはれ見も知らぬり犬塚信乃の親文五兵衛が織り死  
 ちぬ舎藏へくもあはれとて答は胡論ありは夏は熟する老人の僻耳をい  
 あはれ此度の恩賞は親の裸體を免せんとゆめ彼首級と取ゆく包み  
 袋よき寄されが莊官檀内受りて実檢を備へる當下新織帆大夫ハ  
 包も衣ととんかつる又ち披はる首級を又骨相圖は合しとん



忽地横をど礮と拍く感をもと半响許満面は笑を合ふ某を招き近つ子  
 小文吾微妙に働起しふ紛々くもわぬ信乃が首級を進りえん文五兵衛ハ  
 科を免して汝と共に宿所は還さん。これ亦遅くあつて速は辭我にかへりて  
 夏之趣を言えあげば急慢の罪をゆるす。と人々を走らせ成兵を退せし  
 餘のうら云云とち案しつ檀内はあちをゆるさせむ程は露霽く見外干  
 六帆大夫は促装して首桶を携夥兵をゆる遠くかへり去りぬ。父は免れしを  
 相伴入江は還るふ彼権謀をもあねば身の縛の釋をもと歡ぶ氣色の  
 かく却まらうみ負ある宵中さそと推量れども路次めあれが音ふ由りかて  
 宿所かへり着る。大道徳は迎られくみ子舎は圓居し。身かりの事の趣  
 房ハ義烈活蘭が狂死及某血の奇特ありく大塚生の雜瘡平愈大ハの  
 親兵衛が玉のう瘧のう念玉觀得而修験の本名本心迷ひかくるが父報が六代

道徳も人々を舟に乗し露を犯り市川へ遣はる。そのと告めは父はうと  
 かく毎下さびの擣り又下さびの擣り且感し且歎く涙を袖に堰く。膝は  
 流れてゆく水のうぬをさると有繋は花の心弱く今ゆは俊子立かこ  
 ぬれば汝ハ道徳は俱してと市川へ赴はく妙真はあま力を勸ね房ハ活蘭が  
 野邊送り今宵をあらんぞん葬のう果か汝ハ彼両友と潜り舟小  
 乗し大塚まで送り。これ共侶を愛ども婢兒們ハのうとて死す。や  
 彼ホハうり来るとも親子齊一とくゆは留守の程を舟にり。且懇む彼拒を  
 えバ又哀を憎人の家。庶は密を折添く看経し。あんを老人ゆを  
 相心し。汝ハまづとを閣せとく。そのをぐる親の意は任し。彼此は  
 血は降る物大く洗ひ流して道徳は俱して来れ。とく。の際略を報ふ  
 ければ人々感嘆せざるも。就中信乃現ハ八丈五兵衛が無異を祝して小文吾を



勞苦の大きき言葉の末も山林夫婦が死を惜むるぞ深かり。
 且し妙真の涕らわく小膝を進め喃犬田ぬ。かくら子志竟空。
 かくれく輒く逮捕の人々を欺死ぬれば亡魂のぞ歡しく多ひゆん。
 小もみかを在らば現大人のいれ。く華の今宵か。影護り。
 又小文吾點頭く己もさすをわかれ犬塚生の急難の一旦釋れ。
 許我へ遠くもあつ房八沼蒲が死。くを且く人あ。四鄰の人のり。
 向ハ沼蒲ハ聊故あ。行徳へ遣。房八所要あ。鎌倉へ赴。
 答あ。月も終なり。この宵闇を究竟る。夜中の頃。如此。
 命。時刻を。大法師ハ七骸と飲。葛菴のわ。退。
 也。同。枕念仏も夢の世や彼邯鄲のあ。母。焚。
 飯も逆縁の涙を鍋落。味噌味。伏。花開。縁。薄。実。汁。

阿弥陀佛。初夜過ぎ。寺の鐘も無常。
 流轉の巷煩悩の狗の声も更。生死の海。彼岸。
 返。呼吸の徂徠の人の迹。既。時刻。
 房八沼蒲。七骸。飲。兩箇の葛菴。小文吾。現。背。負。
 盤。大八の親兵衛。この時。熟睡。信。横。扛。墓。
 供。立。照文。豫。準備。草張燈。引。提。先。進。大八。導師。
 兩箇の葛菴。間。立。既。背。門。口。送。
 燒捨山の燒。透。只。端。店。携。柴。垣。の。神。涙。
 珠。教。子。唱。名。の。声。も。曇。宵。闇。の。天。斑。雜。星。影。
 炎。暑。の。六。月。も。今。宵。む。り。ハ。肌。寒。風。本。來。空。水。火。滅。
 張。燈。の。人。さ。び。あ。朝。ち。の。伸。あ。り。目。送。り。





天正親王

大塚信乃

雀崎昭文

大田小文吾

六  
山清堂藏



朝露碎  
王家傑小  
送らぬ

大法師

大飼現八

大傳二車卷

山清堂藏



阡陌を邁くと百歩許西へ入ると一町ありて陝小なる岡ありけり。この処ハ昔より大江屋の  
 墓所ありと小文吾のまゝ知れば云云といひあつて。墓に葛菴を卸す。現八の  
 墓の側を壞れ掘起すと七八尺も穿果より當下信乃ハ推見と石の上ハ  
 居措く西箇の葛菴と搦あはす。小文吾現八諸のまじりて空を繰りつ。  
 夫婦を合葬する程ハ大法師ハ空のほり近合掌して引導の語句を唱て。とく  
 諦聽諦聽四大本來空美分別泡沫與夢幻妻子猶波  
 器況珍寶乎疇能隨汝者儻不破壞一團心識亦焉知  
 寂滅之為至樂頌曰荷葉與花共浸影漸瀝涼風蕭颯  
 急催秋其氣清冽其色慘淡涅槃室中物會休息吁得  
 時哉吁得時哉即投與以下火最後之句子作麼生看

破熱池中並頭蓮分明紅爐上一點雪喝

唱つて退くと小文吾と現八再び秋をとり揚ぐ立地は埋れられ信乃ハ  
 大死の石をとり来き推せ。左右は梅の核を伏せ。阿伽と沃き茶草を  
 挿し六八の親兵衛を第一番子推向て頭より額つへ。次ハ小文吾は  
 信乃次は現八は照文次第は焼香面向せり。この時ハ稚兒ハ全く睡の覺ハ  
 けん。訝げば左見右みる細小なる。合して廻らぬ古は念仏の南無と  
 なる。彌陀頼む人おの所作を痛お。死をん彼を。人々嘆息せ。人  
 ち。叔父の死を。あ。又推見を携る。食大屋へ。来つ。背門より入ると。の  
 程。後方。撞。音。四更。妙真。出迎へ。人々を。盆。茶  
 碗。並居て。準備。煎茶。薦。小文吾。墓所。埋葬。為。体。云。云。  
 妙真。これ。子。媳。婦。は。彼。瀬。な。義。の。為。



共命を預るは世の雋傑達は柩を送らざるや伯んや況祖父松平の主あり  
 師ありと云えたる金碗大入の子は師より道徳を引導せられ五山の衆徒を全  
 聚して経痛せし中を優へく十萬人の道俗は推の繩を曳きてより渠ホガ為る面目  
 あり亦これらありて中を尚しく孤獨を孫えあひ捨られは河ぞう歎きゆるんやと  
 のひても又も歎く袖は黄縁の稚児とて臥房は伴へば萌葱の幅の七布八布  
 廣げ今ハ化野の中は捨る撫子の軀を睡るも哀れかて又妙真ハ舊の処はせ  
 多の改遣火焼く管待は小文吾れをえたりて大家は甲夜中もひひるごとくあり  
 辭我へ遠くもあはぬ斯くも前を坐んた是れ其ハ曉をゆく犬塚大飼両友と舟は  
 大塚へ送るこのやうな父も豫くありとゆさうありあちも商量決着あはれ  
 心急のほそそしとあは妙真も寄るそは若残しと惜まれ切く初七日の夜も  
 留るく受どもさる筋はれはさる中さる夜は深なるは明果もあて残るふ

相譚と慰れは信乃ハ現ハ共信ハ妙真も對ひて此度某ホありあ令  
 息賢も稟する恩義ハ今さうに演盡せりハ後難を憚りて本意ハ  
 故郷へ赴けどもおれ故ある伯母夫許再びこの身と寓難より只同盟の一天士犬川  
 莊助一字を額藏と呼ぶものは潜るは對面してさう入るを告ぐこの餘の  
 所要も果さるやとあみ外亦他さるやかれハ所不定の身一旦袂を分つとも  
 あちも実生の犬士あり鄰郷は犬田父子ありのれは疎遠まぐるもあはれ嫡孫の  
 為自愛しく哀戚を於傷られしを再會の時中を心緒を盡せばれ  
 とて昔の別は妙真ハ心ほをけし忘るる要時頭を擧げりる當下巖崎照文  
 懐より準備の沙金を五包より先三包を肩を求るも信乃現ハ小文吾  
 らハがほり近くさ寄る三天士の金ハ三十兩を下包を奪り尤些少の東西あれども  
 此度の路費を資するも私の餞別あり里見殿の賜あり辭を納めんと







且杖を駐つての遠くへ行く再会先んその俵に納めどと懇よと此諭せ信乃  
 小川の感佩して遠よの意は住らう。これ彼の問答は夏の夜の短く明を  
 鐘の音は信乃現ハ退却く行装を整へて辞別しとんとれが小文吾も亦  
 別を告ぐ遠く身を起すと如真急は呼笛やく準備の割篋を遞与忠小文吾  
 これを受とりて某ハ大塚まぐこの西支を送り届け彼犬川莊助も對面を  
 知りければさうさう西三日遅くとも四五日の程ハ必りうきまへ一賓客達ハあふ  
 笛め又仍徳へも憚りしが父も翌のちハ市川へ邁んといれれどもかち相譚  
 等閑なりて款待受とてハ妙真領をくまあちめくつが彼地は遠苗あふ  
 とも房八沼瀧ホが初七日の連夜の比やをわくともその期を推すとさあ入江を  
 びらくもわくはあつたのちのち後をせと回答く河岸は立ればハ大照文も如真  
 共侶水際立てて目送る信乃現ハ再會を契りて船は乗移れば小文吾も

閃りとも来と掉りのぐく推しをてと黎明の潮合は漕れくく船の  
 迹をたどく世の中は別とてハ牝鹿の角の束の間も惜く脆た人のそわ  
 かり却説この日亭午の比は文五兵衛ハ行徳より来より妙真をくこれとて  
 ちをゆくを来よりこれとてと真成は上座よをゆる送は涙吐て要時ハ  
 何れもゆいゆいあるトハそが背向はかりと頻り涙をうちめバ客も彬  
 かく腰ある角を技ぞ推し居く胸のわくをわわわ。あてなく目を紛らせ  
 ども紛れぬの愛惜の歎の霧の離中を憂を隠中をぬぐもわわとやうやう  
 涙をいけん文五兵衛ハ畳む角を側は措く喃阿懐よ小向上る房八が  
 孝かり義あり潔然今般の送言曲よさうりささうりは義を竭さげとも  
 世を隔てる怨を執念深今さうり何とさげきかかかかハハのあま  
 ちうちもなりやうさうき憑しとあらんをわわ人の追薦わわ沼蘭なる大分



うきやげの胸の痛は諄々をうらむるをよれ小文吾ハ彼面友を送りて江戸へ  
 起たらん又ニそのの賓客達ハ奥の奥をうらむる子舎五秋と向ハ妙真涙を収て  
 現宣ののどろく子どろくがうらむるもいへども絶つ間あれたと又口説立く泣を  
 冥土の碍りとわん犬田との今朝未明は船を彼二を大塚をうらむる送り流  
 遅くとえあれ四五日大還らんといれりかれば後安うらむる大道徳と蛭崎の  
 子舎よととつをあれ誘ふといひ子と身を起さんといひ程は七八の親兵衛ハ外面  
 より走り来り祖母より物と携を推をえくまの慢行徳の外祖  
 との茶をせしは礼をうらむる額つらうと文五兵衛ハもは引を膝まうら  
 来り大和郎はさく要時ハぬ間といひさう大人あうかりやうり物取えと搦探  
 せを袂裏の花黄葉田舎糕を袋の底は透与共受く戴たる伶俐めどと抱死  
 掃く頬と合ら頭を拊つ愛うらむる忽地はあひおらんを抗うらむる単衣の腋溜り

牡丹は似る燕をく只顧感嘆をうらむる妙真ハ孫ケ腰著る獲身囊の切  
 解後く彼仁の字の主とも傍中示はせん文五兵衛ハ遠く懐紙の間より  
 眼鏡を取らつりくともいへる感と己は現玉といひ燕といひ字にやと灼然  
 既よかる奇特われ孫が久後とも憑く勢失ハもあやといひ玉と護身囊よ  
 納りく腰に著るうらむる又文五兵衛ハ妙真を先よまうらむる子舎は起たつ大  
 敗又は對面く送る意を演情と説く閑談をく肅やうらむる大ハ昨夕三  
 犬士と竊ハ山林夫婦が柩を岡に送りく埋葬一為体及犬田大江の舅甥ハ  
 犬塚大飼ハ等しく里見家ハ過世ハ倅の趣をと示せハ照文ハ亦来  
 意を告ぐ賢を招た士を徴も君命を述傳へり又いふうらむる此度某ハ四大  
 士を相伴く安房へ還えといひりハ彼大川莊助とあや一犬士今ハ武藏の大塚ハ  
 あれば同盟全ううらむる大塚大飼犬田ハ且く徴は忘せられり里見殿の家臣ハ死



前諾ハ違冬々々然ハとて空しく帰國しく云云と云えあえん八面が足  
 かりあり此度ハ親兵衛と自也の證よぬ還りて主君の見参入れと議に  
 是も祖母ハ辞讓せしむるありて亦もあらずかれども未憑に  
 奇特の小見との市中や育ると安房の藩中や人とわかれその子のあはれ  
 可兒謙退辞讓も更もあらずの残足下は兼引ハ妙真も推辞さへ今  
 とそ急ぐまわぬども安心の為告るの事とセバ亦ハ大法師も共侶ハ辭を盡し  
 懇に勧めり文五兵衛もあましく寔ハ怪死因縁ゆく拙郎小文吾ハ此  
 物教をぬ孫さへ大諸族ハ微もあらず幸よとせかれ孫大ハ親兵衛ハ  
 文夫といふ四犬士先も何ぞ微志死す勿論の事あらず渠ハ東  
 ぶねのあまぬ小見ありと今四犬士の名代ハ殿の見参入れとてその心  
 進むあはれ又唯推辞もあらずの心ゆく退くかば無徳のため進退ハ某とて

ついでん妙真ハ魚頭ハともども仕らんといふは親を喪くともいづくの  
 日子を經む候七歳未満とも些の慎みらん初七日を迎ふ比ハ小文吾もあま  
 又これ彼と商量し見首は後々これ犬塚生の厄難の既や釋せん世ハ  
 憚の関もあらずあまのめをせん又行徳へ来ぬと素人宿ハ町寧かれも心  
 かたむのもあらん客店の無造作もがれおと二この隨意道田あはれ他  
 かくい人の城ハ大照文ハ秋びく送みかり慰めりかてこの日文五兵衛ハ照文  
 相伴く行徳へむり去りしれり大と照文と或ハ二日或ハ三日送代ハ市川と行徳ハ  
 宿しや四五日を送る程ハ房ハ沼蒲ハ初七日あはれども小文吾ハ大塚より  
 宿もさへ文五兵衛ハ朝ありきく竊ハ追薦の法蓮を資れハ大連夜や流  
 經しつ照文も正首も俱も席まつかりてそのかた迹を吊ひりて程ハ秋の  
 初風を立ちく外の夏越の幣がも流れて河岸はあまぬも小文吾ハあはれ立ち



文五兵衛も妙真も心もとれりしを大照文ホ相憚り時七月端の二日大光  
 きのぬり行徳あり朝と起る文五兵衛の事これなりと思惟う大照は  
 ぬり事必故あるを信乃は定うは告ぐも伯母も伯母夫も甥をせりんと  
 謀らば彼村雨の力を奪ふく賺して許我へ遣ふはあれりの嫌疑あはれは  
 信乃ハ故郷へ起りて伯母夫許身を寓ぐ云云といひことの親族は憑りぬ彼を  
 亦犬塚が久恋の地はあはれ只その友と貞實の婦はうへ人の人を報をきひ  
 のく人し送りぬゆひ小文吾もけいむもかへぬ其ま不測の事あるは拙を  
 ぶん有り貧道彼地は赴んや犬塚犬飼小が旅宿と何処とありはとも大塚の庄官  
 墓六が小廬の願藏の庄助を竊訪り立地その消息をゆては假れは  
 かくも房八夫婦の初七を果して大塚は赴けり彼犬川庄助は酒やま對面とて  
 年来の行脚の趣意を告ぐ里見殿の家臣も死契約をせんとせり今あり

遺りまき夜の小文吾と必久人頭を病むとくは文五兵衛は心ど且く  
 刑後にも後を掛り市川より藤崎照文来りて船に同室に迎入れて大法師共侶  
 件の趣を告ぐも照文も亦然りと法師彼地は赴けりこれなりし便宜は某  
 今朝出てきたるものもしくこの相憚人となり親兵衛は二親の初七日を果  
 ぬり事必故あるを信乃は定うは告ぐも伯母も伯母夫も甥をせりんと  
 やく兼引く押り小文吾の事これなりと思惟う大照は  
 厭はれ彼地へ邁んといひて日頃の鬱胸をすくは足れり執念はしくと只管  
 稱賛あるなるかき文五兵衛の外はゆく便糸を求るは末のには出船ありあり  
 大照文は酒食を羞めて款待を程よその時刻もあつたり大ハ行装を  
 整へて還りゆくは照文も照文も後は跟先も立ち入江の船場を送り  
 岸の波もかき日を翌と契りて袂をもちぬかして大照文はあつたりこの趣を



妙真は報ん之文五兵衛は辞し別れく亦市川へ還りたり嗚呼趣舎の不定あり  
待逆期をく値遇し時あり別離し時ありあては別れくまた遭ふ現風雲の  
たよまひ親串着愛前諾後信料りく世間を急ぐ離合と聚散あり

第四十回

密葬を詰る暴風妙真を挑む  
雲霧を起し神靈小兒を奪ふ

大が武藏の大塚へ赴けく又三日をりを経てこれ亦信をり次の  
且照文は妙真の宿る小文吾が還らぬ彼処の友を留められて必しも  
日を弥くしておぼれりあつてをれを翌日必と契りくる彼法師より約束は二日後に  
つれをたどるやあつて心より昨夕更蘭く古那屋にお還りて飲これ行  
徳へ邁るらんいざなり来はしむ文五兵衛と相譚く又彼地まで赴けり  
何をしかさひく疑ひを解くやわんやありておぼる言ふかと又妙真

嘆息して現宣ははるく胸をひくぬき小文吾をり言を食打めありあつて  
道徳を何くおぼれりてあつては然そおぼる迹を追は彼地へ  
赴けりおぼれり速くせめては是処と行徳は侯めりあつて  
増んのおお古那屋をありて便の有無を問はけりあつて翌日去日八兩人は  
一人信のかたを信と應りて照文は寔は然りと應りて徳へ赴けり  
かたは程は妙真はあり悔しむ歎く日教はあつてあつてあつてあつてあつて  
二七日は當るを今朝は生平ありあつての繁きよ霎時珠数把り暇ありあつて  
正午よりやより大が昼寐せし間は香盛流んと家畜あり定香盤を却りて  
かた垣し又撥かたり灰は涙は湿れども立ともあつて夢の迹煙となり人とのあつて  
膳を心の闇を弥陀本願照るを燈と燈明を卒と撥起して緑香は緑し  
ふも香樹は四條五條下まは正念唱名應頂礼依佛依佛法着経は外へ憚り



木魚の音も時移りて絶間なく積らば功德高き山の石も打たば化るといふ未の比歎  
 横日影背門の槐は秋蟬のありあり戸を暑くする浩処は祝声高く阿懐久しう値  
 かり死を呼びて背門より来るものあり妙真は誰と心ゆく木魚を遣り珠数を收ま  
 りを起さんとする程もよめあはれとなり縁頼る實は會釋もあくまどかけく走り  
 礫と推開くと礫をたたくるうたえれがよめ人此年の齡五十ありやかたき人眼圓鼻大  
 頬骨高く肩厚く板齒一枚脱ぎを臘石をく補せり皮膚ハ赤黒く  
 秋茄子の如く髪鬚ハ半白く老冬瓜に似り黄庚木綿の単衣ハ肩と腰と  
 汗濡く申の時よりありさう積鼻禪の花より死をこれんありし顯しく片  
 端打せし裾も下さば四空柱に身を倚り己が隨ひ高胡床近辺の團扇を  
 手抱白より揚ぐ衣領を推披き暑しくとうち扇げば戦く胸毛の熊の  
 似る花繡え月輪歎命と書し瘦肩は掛るは拭左ひは搦て腮の下おん

流る汗を頤握げ拭ひたり。是土地は名々暴風の船九郎の  
 宿も定かば彼此の身を備へて船を漕げとも酒と賭博の耽り  
 荷を飛糶減まらぬ。ぬ風吹ありし。大房ハうら腹をく大く罵り懲りし。  
 介後ハ寄つげりし。今ゆりをく事なれば妙真ハあはれんがをく  
 面色しく背門より奥まで進くと呼門ありて来る人ハ誰あつんと訝りし。  
 居起す途を断られし船九郎とのありし。風吹れてあへ訪れし。  
 中んと寤れし。此も羞むるもの鬱怏ありて銭がたれ。洒落せし濱邊の貝  
 劣れども風吹れく。あはれ波は接れく。寄るもあはれ。日影計の奴原が  
 媚もて讒告をりん。あはれ哥々罵られく。安否も問はれり。あはれ  
 かくあれ。畜起馴染と今ゆり。あはれもあはれ。氣持く。あはれ。







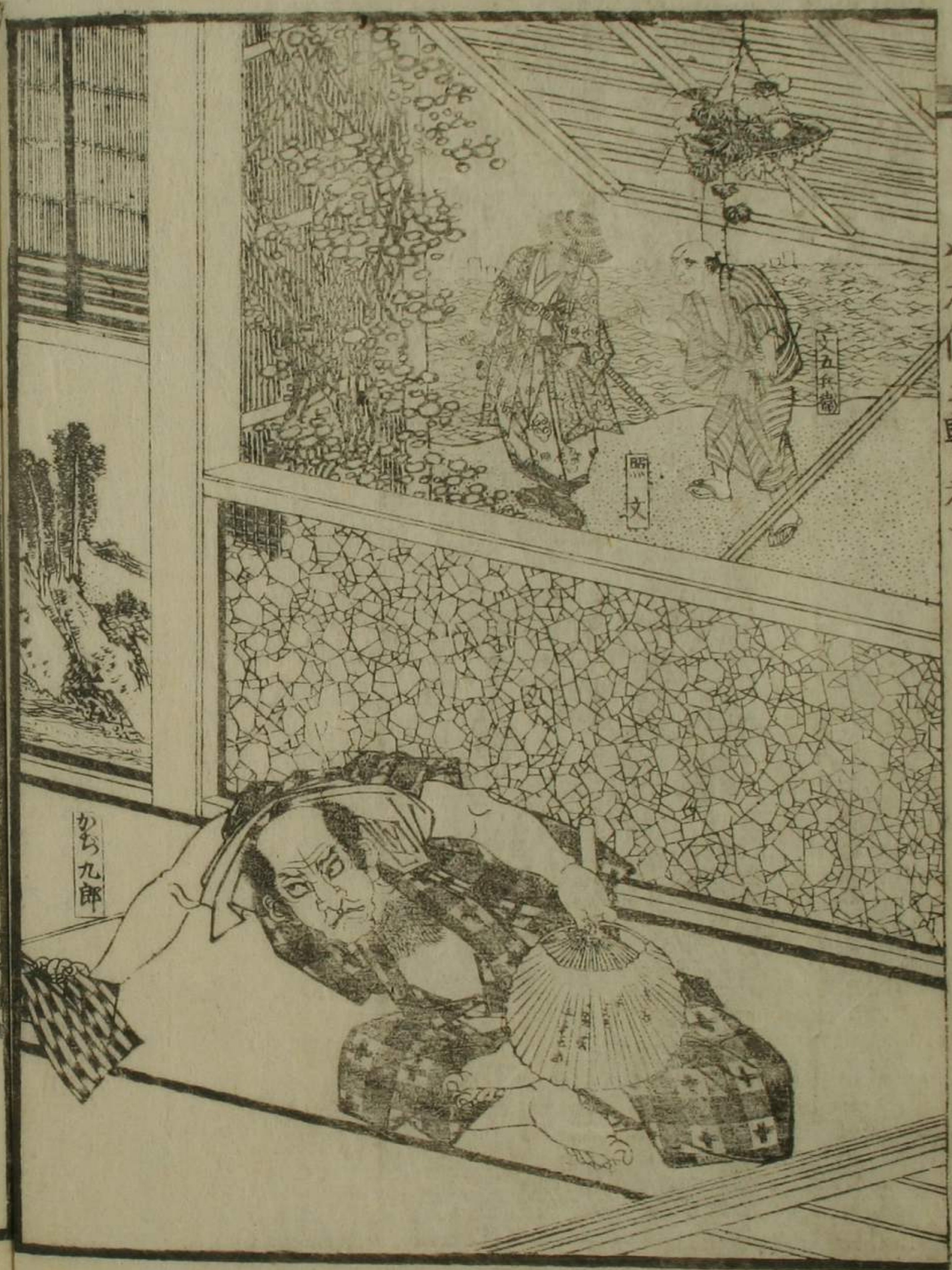






八三傳口傳卷一

十八  
山青堂藏



八三傳口傳卷一

山青堂藏



六傳二車一

欲するとも既子八幡の相撲より恨を含む妹夫は頼れもせど諾ひもせど件のつれ

連なり六月廿二日の曉昏葉崎中へ山林が犬田と出會の相撲誰とてあぬぬめり

介を云云といつて先取次あるの偽りあるはのこれよりて猜ひの小文吾

あの哥々を殺して逐電せりあつてこの親文吾兵衛は竊に金を和鮮れん

身は子子の亡骸を阿容とてとく人おもせれば葬らるあらんらんが想えん

女あつた朝日なり月々大のみを夫とて替り替飽きよよは樂せよと人目

たつた念佛三昧の秘の呪論より燈地彼新墓と復せよと目物とせんと立場

裳を楚と引直り且俟えりてあり彼新塚に誰かともこの職役はあつて墓

所を復る不法かんとその才預とてあぬぬ捨て措けりといはつた晴と

睜と継その役やびにも正しく怨し木敵の悪事と莊官殿は折る賞祿と酒も

の飲み宝の山へ入りあつて空しく帰らんや送は誣る欺偽は下跨あつて岡山へ

引りめめはく面前は明々黎々と分てらん運の際を覚期とせよとさつた物

かへんが心むとあつてけん仇もあんと嚮よひかをあつてあつた人日

つり地密夫と引入ん再婚と招きよその婿殿外に恥ぢつてこの鼻

あり年の程も十と登りた錢をゆつて健ゆく船もしく漕ぐ小口も利く酒ハ喫ども睡

上戸なれば物押ひをぬ柔和の女房の尻は布を敷け辛防つた九年の功龜の甲

より八卦むとときのは堤の賣トは生利とせん女房を下に置ぬと地天泰

ゆく大吉あり身上は些劣れども里中を友達野あり山林が養父とあつてもこの

けつたりのあつた今立地は絶更とこの商量も兼らんと布は竊に岡へ埋や

とのと骸ハ推おもあれ人よあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

ざんや否といは冥罰觀面莊官殿は折る守へ牽しと密夫共侶獄舎を撃

いひや否とも心ともいひあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

いひや否とも心ともいひあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

いひや否とも心ともいひあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた



かれ色好と憎さも憎し腹多くしつふまは汗の千々も心を摧くの  
 暴立まらむりの破れあかんとあひえくさる氣かく墓所のうらみ憚りよむ  
 ありあけの数をぬすの花もあはれとさむりもあはれかばともかとも  
 然れどもそれたゆろ老るも浮氣ハ男の癖ある小苟且よりのいりて  
 実よりとあはれ雨やもあはれ雪やもあはれ一夜の情深草の例は做しとあはれ  
 日と連の月を果ねくあはれ心の変ぬとあはれ定ぬ後わは悔ぬの多  
 べいごころ昔より吾侪は浮るるもあはれが嬢婦はなりとも狼ゲリき濡衣  
 被せしれど何認めさうあはれ男あはれ云云といつたあはれ限りあはれ恨まかくも  
 あひ捨どあはれ又日を隔て来ぬ只今たをあはれ亦理りあはれあはれ  
 りてあはれ冷笑ひ一寸延ばあはれ尋ねあはれあはれ成ぬであはれ口贄あはれ  
 ともあはれ後あはれあはれ恋あはれあはれ否とたと地獄極楽岡の死人と掘ぬあはれ

人ど浮るもあはれ言山ハ只一言否かあはれ否でもりあはれ岡へと又立あはれと遠く  
 推禁さくともあはれ性急之介あはれ忘奴れハ亦あはれハ亦あはれハ亦あはれハ亦あはれ  
 向くと引くと携を振解れあはれ潜りあはれ越ればあはれあはれ追貞縁れせんせんも  
 免れ折く蟻崎十一郎照文ハ丈五兵衛を相伴く行徳あはれかへあはれ背向  
 入らんとあはれ程は裡面ハ人の挑むぞ踏鳴らる箕子の響は作麼何みぞと  
 先に進くとあはれ庖福のうらや衝と入る小船九郎ハ妙真は携著人と追遠く卻舎と  
 拍く照文は忽地礮と突當る勢いあはれあはれ仰く身と轉く倒れ妙真ハ  
 照文のあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
 照文と向くとあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
 折すあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
 この返報を信とあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ



縁頼の簀戸打倒し遙は庭の中央へ筋斗をまくあか疼一痛しくと倒る羅漢  
 杉は携りゆくや多く身と起し七も敵走くもあがしが恨一げはるえりて鉛刀武士奴  
 おぼえくぬ偶怪我の功名で汝が巻法の捷しや。あやうく投られしをこぼれよ  
 膝も搦刺ねれども炎へと裳を褰く尻推向うの敵けは照文怒てあて懲むや  
 女あどと侮りる狼藉はゆもゆも其とて密夫と罵りし何れぞ再そび尾陋の  
 雑言今へも許しかたし其処を退れと教圍く刀を晃と引抜けは妙真吐嗟と  
 推禁めく渠は名は悪棍あふ傷けかぶあつらん鄙悟よんを兒は棒打  
 敵もあつ死ぬふはゆも脱しぬと煉られ照文ハ齒を切り疾視する  
 船九郎ハさも丁をとうのんく呵々と冷笑ハ刀を抜き威し七人を殺せ自身も殺る  
 有敷子命ハ惜りるを砍らぬ刺せやゆもその鉛刀り骨のお暴風あハ  
 砍らかん砍らハ暇をもうさんと猶豫し誇り擬廣言あはちよ粘一衣の土とち

拂ひて櫓を草履と取く足とあ罵りあつて逃去る當下照文ハ刀を収めて縁  
 頼あり背門のくをえんもゆも彼悪棍ハ影もせぬ隙を隈あつらん僅小あおく  
 又舊の席はかり著く程は次の間ハ立在て件の為体と剛窺る文五兵衛ハ進入  
 照文と共に妙真は事の本末と咨れは妙真ハ倒れる簀戸を遠く推立てさく  
 舵九郎が狼藉を渠が邪猜の條にいれり云々と潜り小報あつらん兩人齊一  
 驚えく介ら又禍のあつて起し猪やもゆもをを額を聚り俱思ひて疑  
 照文ハ後悔の巻を捺りく嗟嘆あつらん趣あつらん知らば彼悪棍と撃て橋の  
 根を断べくゆも既彼奴と走りしは且も躊躇あつらん又いつか故かといふ  
 舵九郎は告海をん彼同の新墓を造るゆもあつらん山林に亡骸は首初はあ  
 信乃が軀といふゆもあつらん夫婦合葬をりゆもあつらん其の妻の亡骸ハ陳は  
 これあつらん穿鑿せられ彼身あつらんあつらん露頭を死骸料さしあつらん



及び大田父子と大江の老母もつりて脱死せり。船九郎と走りたるに  
 油断大敵悔なりとあつたり。後れりとも追蒐て數日果は外は術を以て  
 のひりてと刀を取らん。文五兵衛推禁めく官の趣理りて遺恨誰に  
 されども今や連をも及ぶ。且船九郎この里に定や宿所なり。只同惡相  
 聚は無頼賭博の友の多かり。愚按は火ども譬は子母の堤の水は一擲の壕を  
 して堰たてて懸は今追詰も毛を吹く疵を求る再度の後悔ありせん  
 這奴は這奴が隨中もあま未だの禍を避す術とわきまを早は要あり  
 ぬ。と棟りて照文は僅に怒を飲めり。早と文五兵衛は妙真とんぐりて  
 南阿懐兄弟は何と云ふ。小文吾武蔵へ赴けり。既十日はあましも渠ハ  
 さうり道德さう三日四日歴ても送りぬ。さうは巒崎は妨れり。相彈く  
 ち。慰るもほり居つてをみる。市川へ赴けり。又妙真と商量見誘ふと

つれ立ち途のそぐりてあま又も。胸多不慮の  
 のと。脱死と向は妙真嘆息と善の報は道理ハ  
 豫さ。義主節婦も。枉津日の。幸かた人幸  
 過世の業報かん。形死身の形死世の。道は吾侪は。死に  
 毎失の罪は沈むも。推死孫は。年未の心つ。甲斐わん  
 女子。浅き。か。決り。先。涙  
 照文棟り。禍既。蕭牆。起。知。得  
 長食。無益。大。小。文。吾。と。あ。侯。ん。甚。危。某。ハ。大。八。の。親。兵。衛。と  
 携。速。安。房。へ。還。え。祖。母。も。孫。も。傳。添。く。且。この。地。と。速。離。ら。彼。船。九。郎。が  
 毒。氣。を。避。これ。究。竟。の。便。点。か。この。処。と。た。去。く。封。疆。を。退。か。惡。黨  
 是。れ。莊。官。あ。れ。數。百。人。り。追。蒐。来。る。も。怕。死。り。古。那。屋。の。主。は。宿。所。は



又りく今宵の船に乗走りて翫ハ早且と大塚へ到らんと易うたしこの條の  
 趣と大と四犬ま報知して又進退便宜をぬかハ皆伴かく安房へ來り老母ハ  
 其の起初の準備を急ぐと急ぐと送るく示し合はれバ文五兵衛感佩してこの  
 後寔に然るくハ舟ハ親兵衛と妙真と相伴ぬ猛のりや杖者ハ  
 某ハ孫を背負かく郡堀まで送るくハ阿懐急ぐと慌く物を取送は  
 と心をつらバ妙真も遂なる後ハ杖者も睡覺る推見ハ新ハ衣被せ更く  
 護身袋とそつは腰ハ楚と著るくも衣も着く衣と袖も折れ杖者  
 整つて貯祿の沙金をどハ財布の傍に身著て家厩の位牌古記舊録孫ハ  
 被替の衣も巻も遠くとり集めく下祇も包もさる照文ハ水行も便する  
 多ども順風かぬ心は任は只共走り走らんをこれ彼を急げ程  
 きのみ江戸まで船をせし依介と小厮の只一個は妙真ハ膝

促装束をとりてあも地へう邁せもと訪けは答を妙真ハ曲々報はり  
 登崎の八と云云の処をぬぐんと宣ふ釋はぬをち任くせり  
 遣ふくわは行徳の外祖さぬが途も背負せんとわへりもゆをせし  
 どもわな心りあも吾侍も共侶ゆとわへ杖者ハ杖をわへ今還り来  
 めのとさ遣ふ心は似れど些の祇包ありあもせもゆをゆゆとせ  
 依介一残及ぶとを易にさあハ一日船と漕走りて足ハ疲すと  
 かたは今かへりて何うあへん何処も俱へて快く諾はる心はゆの厚  
 ち主の爲に勝を感む他ハ高エホとわなぬさハ件ハ件の中結は  
 負しつあは草鞋の紐を締むく文五兵衛ハ大八の親兵衛を背負ひぬ  
 苗守ハ彼耳疎ハ老婆とのと送せども有繫名残ハ惜く立よ杖よとわ  
 あはびの支度も初々整へる照文と先立立く僉共侶背門よりわな人面と

八代傳五朝卷一

廿三



二をせどとて笠あう傾けく間道より進む程は落日暉々とて野禽飛ぶと急こ  
 袂は苗の夕風八昏の秋暑は似てくわん急ぐとこれ足弱の動もれば後と  
 待つてハ又まゝ市川の町を離れて田舎路を上總のへ並松原をまよるれば  
 処々延繁の茅萱の下は集く虫の音はるる暮初日没はなりなる  
 浩処は前面より下叢叢松蔭より頭れゆる一個の癖者頭は拭の糾鉢巻  
 一と腰は一口の短刀を跨右より八九尺の長權を挟て柳色深の筒腹被の牙籤  
 煩ゆる諸肩祖る單衣の西袖と前は締く毛臍陽著は衣の衿と片端  
 折せ、躬割の打扮髪ハ皓く面ハ赤涅めく山稜の暴らぐく骨を太く  
 膚ハ黒斑めく罔西の宗るは似く大道ハ陟と立塞るとこれ別々  
 怒れば船を覆へ又屋とも倒るとの現暴風の名ハ船九郎あそ有る  
 當下暴風船九郎ハ持る權を取直して横へ又推立く酒氣芬々する

声高きふをせれ賊奴輩違ふく汝ハ既ハ悪事の巖房をなれば眼まれ詰  
 られく後家共侶は逐電状かくあはしと猜せ、兎殺計の甲乙駆催して門ハ  
 狗と附おたの途ハ視法師と立置て夜行をうける路脈をこの海道と觀著て  
 先へ輪く張る綱は宿栖迷ひの旅鳥捕へて絞る隙費は脱れくしと  
 観念く女と速与して死の逃をのぞく道とやと旬旬は嗚咽て疾視  
 たり照文これとて先度ハ懲ぬ不敵の悪棍今雷の根を斬てハ地方は  
 愚と何時ハ除ん刀と穢をハ惜るれも望は任く先物ハせん敦圍猛く對ひ  
 進て刃と見ると引技けハ船九郎ハ声や立ち衆皆おと呼ばれをあらはすと  
 左右あり高萱の中ハ松の蔭より或ハ三人或ハ五人折權大魚刀を引提る  
 夥の悪黨簇々と冬蟲のよう跳びく照文亦を攬箠く撃けんと競ひ蒐  
 とハ照文ハ些も擬淺く前後左右ハ引附く面ハやハ戦やうその間ハ





諸善船院  
衆惡  
途ふ起る

妙真

廿四

山崎堂



文五兵衛ハ大八の親兵衛を妙真に抱く。小見と婦人ハ持て危し。依介とて着の  
 路を市川のうへ退死せんとく。とみ程もあらず。後方より下隊の悪黨突然と  
 頭をかく。咄と嘯く。數人と競ふ。文五兵衛ハ信とんく。かてハ脱きこく。とく  
 妙真を背に立。と旅刀を打振々々。且く防戦せらる。老人おれども素直の町人  
 わざれが。數りたり。法は稱く。敵ハ三人。浅疾を負へども多勢を憑く。と  
 物もせ。依介ハ亦文五兵衛が失あんとを。怕れく。援んとあ。あも身寸鐵を  
 帯が。妙真が捨る杖を。お振立く。進ま。この時やも照文ハ。三人を破  
 伏せ。五人ハ深疾を負せ。わも敵ハ目ハ餘。大勢おれば。後方よりかへる。暇も  
 あ。依介ハ。九郎子近つんと。受ども。な。推隔れ。進退自在と。ほ。と。介程ハ  
 依介ハ。文五兵衛と推並ぶ。且く敵を柱へ。と。も。ハ。一條の杖の。と。三。方  
 あり。打。敵の器械を接。と。眉間を破。と。傷。痛。れ。要。時。も。

堪。巖。と。漬。鮮。血。と。り。若。と。叫。文。五。兵。衛。ハ。これ。頻。り。は  
 隣。む。大。八。の。勇。氣。も。脱。も。衰。へ。入。傳。難。く。遠。巡。く。妙。真。と。間。違。り。あ。る  
 透。と。窺。み。九。郎。ハ。薄。暗。に。走り。妙。真。と。親。兵。衛。共。侶  
 楚。と。抱。け。吐。嗟。と。叫。身。と。胸。の。解。を。と。角。へ。も。声。あり。紋。く。泣。推。見。の。柳  
 と。和。り。大。八。方。の。隻。少。子。技。と。り。九。郎。が。抱。腕。を。骨。も。微。れ。と。と  
 刺。く。裏。胸。く。あ。わ。ね。も。有。繫。疾。痛。堪。が。う。驚。れ。怒。く。要。時。あ。ら。
 あ。何。と。身。を。戦。く。組。る。面。を。解。く。妙。真。ハ。推。見。と。肩。を。揺。被。迎。足。切。り  
 逃。入。り。脱。も。道。の。跳。躑。り。大。八。の。親。兵。衛。が。肩。尖。を。と。と。廻。り。引。く。と。技。の  
 果。を。推。放。推。獲。く。左。の。脇。に。捉。籠。り。妙。真。ハ。稚。兒。と。畧。奪。お。れ。く。あ。く。は  
 脱。路。を。親。兵。衛。と。り。大。八。と。交。は。此。も。あ。く。と。痛。む。入。釋。死  
 あり。科。も。年。む。は。人。は。あ。る。あ。を。返。せ。復。せ。と。叫。び。引。引。と。立



開東の谷小  
児と罵りて  
餓鬼と云  
その食と求  
下の中む時  
おれおれ

おれおれと陽射しと覗のく横路を下町あり走るあゝ妙真も  
稍身と起しくわね建前と暮るるを船九郎ハス入りつ朽樹の株尻うち  
うけく脇腹を抱き一稚児を弄玉のく投揚ぐ地上へ墮とるも落せ息も絶  
べく天叫ぶ声とあまの薄月夜妙真ハ轉つ轉つ喘々近づく程、船九郎ハ  
稚児を又引くく動せ尻尻奴且よくこれと云ふ己があらは後をこの餓鬼ハ  
今寂滅為樂又同行の三人ハ腹計の教輩ハ任用し人ハ活てハ之を  
べつ岡へ埋り死人の縁起も彼も此もく今より一期を憑とわらハ  
市川へ行く還りく今宵を二世のり下免あつた餓鬼も下ハ措を阿乳母  
日傘で饅頭の皮を刺り榮曜の表盛否と又ハこの細鱗を肉將めく  
酒をまゝあつて決めく心をせよ心をせよハこの餓鬼をとる應の石を極  
合しく胸前打んと振揚れば妙真ハ吐嗟と云り見ると目も眩と云り叫ぶ

中よよ声おれおれと腰をく小草の上は身を投とて共死人と泣沈む  
かろし程は照文ハ廿餘名の悪黨を八方へ散散しく文五兵衛共侶ハ妙真ハ  
方ぞ索のく梢の処へ走りの打り雲間を漏る月影は遙はるれば妙真ハ  
道次は依り船九郎ハ推仰向方稚児を左より押へく右より石を搔合の今や  
打んとゆ揚り兩人存一駭に怒るる等霎時と呼被つ僅に走り近づくと  
人保を取られけ又のりわもせん走り齒を切り巻を捺りく瞬も疾視する  
船九郎も亦これと云る頭を拳口を閉ぢく轉がごとく物笑ひ放し兩人あつて  
死む一歩入りも近づくとこの石をく餓鬼奴を單懸尻奴ハ喘泣くよと云  
雲の天幕草木ハ蔵棚かくま野曠に句欄わく看官おれハ梁カとぞひふ  
あくまのりも七種をく打挫ん欲堪を打く結果人欲望は任せんゆとぞ  
飽あてあつて弄べとも照文も文五兵衛も透わく親兵衛を極ひくんとあつて



船九郎  
屠戮  
神灵一犬  
士を隠も





再び言葉をおもひに合はしめし神の感応冥助と黙禱し怒を忍び心を苦  
 しめ立並ぶ目成る間四五歩は過ぎるを舵九郎は既し斯侮傲し残忍不敵の  
 奥に乘りて早更敷に又呵々と冷笑ひ揃ひてあひひ 骨癱でも汝も兩人を死  
 ねば後家奴も珠教を断ぐらん。餓鬼奴を料理せん衆の牙とてくえよと  
 再び石をとり揚ぎて妙真ハ只を抗いおれよと哭叫ぶ声 冤悲ハ死絶體  
 絶命照文も文五兵衛も今ハ忍ぶが忍れど小兒と鯉ハ谷の大刃難言とのぞり  
 逃まらん 乾竹削はあらん 刀の鞘もどろろ走り進んたる程は舵九郎ハ  
 會する石を閃く推兒の胸と撞き撃んとひる。あつども養狂か地上を  
 破と拍し且怪し目睨る糞粉はれと復ゆり揚る腕忽地麻痺てこれや  
 あつ惘然る頂の上は變態と一糸の靄天引降る電光凄しく風亦  
 颯と音も石を巻れ沙を巻く草木を靡るを鳴動も或ハ明く或ハ暗く

雲ハ漸々降る大ハの親兵衛を引包むをえり。中へ登れが  
 舵九郎ハ復り驚れ睨る両手を抗ぐが推兒と違りて跳ねる  
 撲地と轆べ足ハさるる向ありて刃ハ地ををれ雲の中は物ありて倒し揚る  
 鮮血濃と雷りく舵九郎ハ鷹より鳩尾の邊をくむと引裂れる  
 軀ハ挫と落さける奇特は照文も文五兵衛も進みり。忙然る後方より  
 嚮に逃る悪黨四五人。か月朽とくぬかへん船棹稍藻川鎌かのく心も  
 物を閃く不意は起る撃んと進むを照文もくえり。大刀真額も  
 披鬚一縦横身礙は砍立れば文五兵衛も相並り再び刃をうち振りて兩人  
 齊一向敵を瞬間は砍片残る奴原舌を挿く刃を引く逃走を三五許  
 追捨て舊の処は立之れが風ハ雲霧を傾沈む五日の月の影のこぼれ送り  
 里見八犬傳第四輯卷之五終



編述

曲亭馬琴稿本

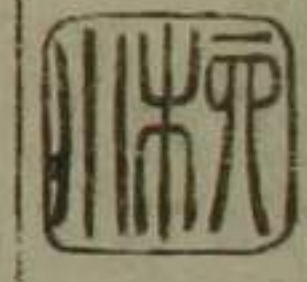


淨書

千形仲道騰寫

繡像画工

柳川重信



剖刷

中村喜作刊刻

家傳神女湯

一包 婦人諸病の第一産後ちのこころの妙あり又ふりこころの妙あり

精製奇應丸

一匳 ○大包二百粒餘入代葉木中包三十三粒代葉木下小包十粒入代五分

婦人つら虫妙藥

婦人のつら虫の妙あり 婦人のつら虫の妙あり

熊膽黑九子

熊胆の正味のものをえらぎ製方秘伝の加けんをつくせり 熊胆の正味のものをえらぎ製方秘伝の加けんをつくせり

製藥并弘所

江戸丸飯田町中坂下南側四方みそ店高

瀧澤氏



取次所 江戸芝神明前のつとや市三藩 ○大坂心算橋筋から北町南入河内屋太助

大阪	河内屋善兵衛	東京	須原屋茂兵衛
同	伊丹屋善兵衛	同	山城屋佐兵衛
同	敦賀屋九兵衛	同	小林新兵衛
同	秋田屋太右門	同	丸屋善七
同	河内屋茂兵衛	同	和泉屋市兵衛
同	河内屋和助	同	須原屋伊八
同	秋田屋市兵衛	同	出雲寺萬治郎
西京	出雲寺文次郎	同	梶屋喜兵衛
同	村上勘兵衛	同	辺江屋半七
同	勝村治右衛門	同	長門屋龜七
同	杉本甚助	同	三家村佐平

名山閣

東京芝大神宮前書舗

和泉屋吉兵衛發售



